

恣意の空間と摂理の空間（その三）

——『序曲』（第一巻）の鳥の巢掠りの少年・覚え書き（二）——

松 下 千 吉

I

(1) 鳥の巢掠りをふくむ四つのエピソードに共通してあらわれる四つのモチーフのうち、（前稿につづいて、三つめのモチーフとしてとりあげ、そのはらむ意味をめぐって考えておきたいのは、孤独・寂寥のモチーフ、即ち、少年の孤独と自然の寂寥との出合いの情景・モチーフである。言及する詩行が、四つのエピソードについては、おのずから前稿と重複する場合も多いことを、はじめにことわっておく。

まず、山嶋捕りの場合には、すでにみた星空の詩行の直前にあるように、少年は山あいに「ただ独りであつて」（I was alone...）しかも「あたりの山々や星空にあまねく平穏をかき乱す存在のように思えた」（And seem'd to be a trouble to the peace That was among them. ll. 322-324）のであり、少年が他人の獲物を盗んだ直後に、星空のもと、あの「低い息づかい、定かならぬもののそよぐ音、踏みしだかれる草地さながらひそやかな足音、が迫り来るのを聞いた」のは「寥々たる丘の辺」（I heard among the solitary hills Low breathing coming after me...ll. 329-

332)であった。(以下、引用詩行中のイタリックはすべて筆者)

鳥の巢掠りの場合も、昼と夜との違いこそあれ、情況は似ていて、少年が鳥の巢を探しまわる場所は、「ものさびしい山々の頂き」(on the lonesome peaks, 1337)であって、「その危うい断崖にただ独り、ぶらさがった折りも折り」(While on the perilous ridge I hung alone...)。少年はあの「唖々と唸る乾いた風がいかにも不思議な言葉を発しつつ耳を吹きぬけ、空はこの世の常の空とは思おえず…」という畏怖の情動に襲われるのである。(With what strange utterance did the loud dry wind blow through my ears...ll.347-350)

また、ボート盗みの場合も同様であって、少年は「村の宿からひとり散策に出かけ」(Forth rambled from the Village Inn alone, 1379)で「ただ独りで羊飼いのボートに乗り込む」(I went alone into a Shepherd's Boat, 1.373)のであり、そして、湖上に漕ぎ出したあと、黄昏の星空を背景にして、「それまで地平を限っていた険しい嶺の背後から、あたかも意もて動くもののごとく、巨大な断崖が頭をもたげ」(When from behind that craggy Steep, till then The bound of the horizon, a huge Cliff, As if with voluntary power instinct, Uprear'd its head. ll.405-407)。「いよいよ又高くなりまゐりつつ、星空と私との間に立ちはだかり、なおさらに、生けるもののごとく刻々と足どりを見はからって追いつ追いつてきた」(And, growing still in stature, the huge Cliff Rose up between me and the stars, and still, With measur'd motion, like a living thing, Strode after me. ll.409-412)とついでに断崖が「lonely」など寂寥をあらわす明白な修辞はないが、あたりの丘並みに屹立する孤高な断崖であった。

さらにまた、スケート遊びの場合も、少年は「いくたびとなく、とよめきをあとに、静まりかえる入江に身を退いたり、乱れ騒ぐ群れを尻目に、たわむれにあらぬ方へとそれてみたりして、氷の面に光る星影を横切り滑る」(Not seldom from the uproar I retired Into a silent bay, or sportively Glanced sideway, leaving the tumultuous

throng, To cut across the image of a star That glean'd upon the ice..ll.474-478) のであり、そうした独りきりの滑走の楽しみのおりおり、少年が「ここぞとはかり、踵に力をかけ、身をのけぞらせて急停止したあとも、依然として、あたかも大地の日々の運行を目のあたりに見るかのように、あたりを廻りつづけた」のは「あの寥々、と並び立つ断崖」であった。(Then at once Have I, reclining back upon my heels, Stopp'd short, yet still the solitary Cliffs wheeled by me, even as the earth had roll'd With visible motion her diurnal round. ll.482-486)

(2) このような少年の孤独な営みと、寥々たる自然の情景との出合いは、たんに偶発的・物理的な出合いというだけではなくて、ワーズワスの自然体験の世界では、人間という性(human nature)と自然という性(Nature)、およびそれに内在し、臨在するものとしての神との霊交(communion)の必然的・根源的な根拠となる要素であるが、そのことは、各エピソードの前後に、間奏曲として語られる省察の詩節のなかでも、一度ならず、より注釈的な言葉でのべられている。たとえば、スケート遊びのエピソードにつづく省察の初めの詩行では、「大空と大地にあまねく臨在する自然の精霊たちよ、山々の姿して目のあたりに見えるものよ、寥々たる場景にやどる魂よ」(Ye Presences of Nature, in the sky And on the earth! Ye Visions of the hills! And Souls of lonely places! ll.490-492)とあって、自然は「やはり、」寥々たる」(lonely places)という言葉で呼びかけられているのであるが、さらに、(順序は前後するが)、ポート盗みのエピソードのあとの省察の「宇宙の叡智ある精霊よ、永遠の思惟たる魂よ」(Wisdom and Spirit of the universe! Thou Soul that art the eternity of thought! ll.428-429)で始まる詩節につづく一節の、

In November days,

When vapours, rolling down the valleys, made
A lonely scene more lonesome, among woods
At noon, and 'mid the calm of summer nights,
When, by the margin of the trembling Lake,
Beneath the gloomy hills I homeward went
In solitude, such intercourse was mine.

(ll. 443-449)

霜月の頃おい、谷あいに霧たちわたり、
寥々たる情景に、いやならに寂寥の気配が
ただようおりおり、昼どきの森なかで、
はたまた、夏の夜のひそやかな夜気のなかを、
仄暗い丘のふもと、水面ふるえる湖のほとりにそうて、
独りなる家路をたどるとき、そうしたおりふしに、
かかる交わりがわがものとなった。

という詩行でも、「寥々たる」(lonely, lonesome) 自然の情景と、少年の「孤独」(in solitude) とが、両者の「交わり」(intercourse) の暗黙の根拠たるべき状況となっている。

ちなみに、先の詩節の「自然に臨在する精霊たち」(Presences of Nature) という詩句の「臨在(する霊)」(Presences) という言葉は、聖餐(Holy Communion)におけるイエスの臨在、という秘蹟的な含著をふまえているのであるが、その暗喩は、いま一つの詩節において、おそらく意図的に用いられている(見方によっては極端に)

平俗的・官能的な「交わり」(intercourse)という言葉の暗喩するところ、即ち「(聖餐による)靈交」(communion)という含蓄と響き合っていることは、いうまでもない。が、それだけではなくて、「孤独・寂寥」の情景と、そこにおける「交わり」という想念は、前稿でみた「天恵としての(神の)訪れ」(visitation)・「介入」(intervention)などの想念とも、『序曲』全篇を通じて響き合っていて、ワーズワスの自然体験・自然観照の神秘的な性格を示唆する上で、少なからぬ役割を果しているのであり、たとえば、『序曲』第十三巻の、あのスノウドン山頂における神秘的な体験をめぐる省察のなかで、人間の精神の偉大さについて、それは、精神が「耳目にふれる感覚的印象の囚^{prison}になるのではなくて、それらの印象によって、喚起・鼓舞されて生動し、そして、目に見えない世界と靈交^{spiritual communion}を結ぶのによりよむべし」(By sensible impressions not enthral'd, But quicken'd, rous'd, and made thereby more apt To hold communion with the invisible world. ll. 102-105) へとあるのと、さういう「まぎしく神に由来する精神」(Such minds are truly from the Deity. l. 106) の生成の恵みに、多少とも自らも与りえた場としての幼少期の山野の情景に呼びかけつゝ

Witness, ye Solitudes! where I received

My earliest visitations, careless then

Of what was given me, and where now I roam,

A meditative, oft a suffering Man... (ll. 123-126)

証しとなるがいい、そなたたち、ここかしの寥々たる風景よ、

幼き日々にはやく恵みの訪れを受けし処、そのおりには

恣意の空間と摂理の空間 (その三)

天恵の何たるかも気づかず、いまや長じて瞑想がちの人と成り、
いくたびとなく苦しみに耐えつつ、私がさまよいあるく場景よ。

と語る詩行の前後でも、「孤独・寂寥の情景」(Solitudes)、「靈交」(communion)、「恵みの訪れ」(visitations)など、重要な基調となる想念が、深い和音を響かせているのが、ききとれるのである。

II

(1) ところで、『序曲』を通じてワーズワスが自然の情景や精霊に呼びかけるさいには、時には上の例のように複数の存在 (Presences, Souls, Solitudes etc.) として呼びかけ、時には前稿でもみた「音楽の調和ある息吹き」の一節における「宇宙の叡智ある霊」・「永遠の思惟たる魂」(Wisdom and Spirit of the universe; Soul that art the eternity of thought) というように単数の存在として呼びかけていて、その両面性こそが、ワーズワスの自然観・宇宙観がいわゆる汎神論的である（とも、あるいはない）とも思われる一因となっているのであるが、この「万象に内在する唯一の生命」(the one interior life... in all things) たる唯一者と、自然の無限に多様な万象との相関について、ここで手短かに、いくつかの想起すべき点をあげておこう。

一つには、ワーズワスは無限に多様な万象の存在が、(万象に内在し、また万象がその中に包摂されるという二重の意味での) 内在者たる唯一の存在者の一端（あるいは属性）として存立しているという『ヨハネ伝』一七章二一などの「あなたが私の中に在られ、私があなたの中に在るように」をふまえた）想念を、たとえば、『序曲』第二巻の不採択の草稿として、次のように、神 (God) という言葉を用いて表現しようと試みている。^①

The one interior life

That lives in all things... that unity

In which all beings live with God, are lost

In God and nature, in one mighty whole...

(ll. 432-435)

[Variant M.S. for ll. 434-5:]... with God, themselves
Are God, existing in the mighty whole.]

万象の内に生きて在るあの唯一の生命...

万象が神とともに生き、万象のそれぞれが、

強大な全一体を成して存在しつつ、

神と自然に包摂されて在るあの統一...

〔異稿・四三四―五〕... 万象が、強大な全一体を成しつつ、
神たるあの統一...〕

にもかかわらず、これらの詩行は、結局、採られない草稿のままでおわたたのである、が、その理由の一つは、おそらく、(一八一五年のキャサリン・クラークソン夫人 (Catherine Clarkson) あての書簡でも知られているように) ⑧ 後年にいたるまで、超越的な創造者たる神観念(いわゆる deus ex machina) を容認するのにたえずためらいを感じつつけ、また、ジョン・ジョウンズ氏 (John Jones) も指摘するように、⑨ 神 (Divinity) という想念を喚起することをできるだけ惜しみ控えたワーズワスの自然体験・神体験を、上のような詩行が充分・的確に言い尽して

いない、と感じたためであらう。

しかし、上の草稿とは対照的に、『序曲』第六巻の、アルプス・サンプロン越えの体験を語る周知の一節、すなわち、

The immeasurable height

Of woods decaying, never to be decay'd,

The stationary blasts of water-falls,

And every where along the hollow rent

Winds thwarting winds, bewild'rd and forlorn,

The torrents shooting from the clear blue sky,

The rocks that mutter'd close upon our ears,

Black drizzling crags that spake by the way-side

As if a voice were in them, the sick sight

And giddy prospect of the raving stream,

The unfetter'd clouds, and region of the Heavens,

Tumult and peace, the darkness and the light

Were all like workings of one mind, the features

Of the same face, blossoms upon one tree,

Characters of the great Apocalypse,

The types and symbols of Eternity,

Of first and last, and midst, and without end. (ll. 556-572)

朽ちゆきつつも、ついに朽ち果てることなき森また森の

峰々と聳え立つ目路はるかなる嶺、

ゆるぎなく滔々とどろきわたる滝の音、

そこかしこ峡谷の空なる狭間ぞいに

わびしげに、ゆきまどい、せめぎあう風はた風、

真青に澄みわたる空の方より、ほとぼしりくる奔流、

耳もとでたえまなくささやきやまぬ岩々、

道ゆく端から、人声の宿るもののごとく

語りかける、黒く濡れそぼつ荒々しい巖壁、

さかまく溪流のおぞましき、はた眩るめくその行く手、

とらわれも知らに漂う雲々、高く、いや高くひろがりゆく天空、

鳴動と静穏、闇と光、これら万象が、さながら

一つ心の働き、同じ顔の相貌のごと、

一本の樹に咲きつどう花々のごと、

遠大なる黙示録の一字、一字、

初めにして終りなるもの、真中にして、終りなきもの、

かの永遠なるものの、象・徴と思われた。

恣意の空間と摂理の空間（その三）

という、（明らかに『黙示録』（一章八、一七―一八、二章八）、『エペソ書』（三章二一）、『詩篇』（一九章一―六）などをふまえた）ワーズワスの独壇場ともいうべきこの情景描写の詩行は、ワーズワスの自然体験における、「万象に内在する唯一の生命」・「永遠の思惟たる魂」という唯一者と、その唯一者の一端・属性として（それに包摂されて）内在的に存在する無限に多様な万象との、永遠なる全一性という観照・体験を、その歎喜と畏怖の絢いませになった生の感動の律動とともに、あますところなく伝え得ている。

ちなみに、上の詩行の「朽ちゆきつつも、ついぞ朽ち果てることなき森また森の峰々と聳え立つ嶺」（the immeasurable height of woods decaying, never to be decay'd）という観照には、ワーズワスから学ぶところ多く、しかもその生前に『序曲』を目にすることのなかったキーツの『ハイペリオン没落』（The Fall of Hyperion, I, 259-261）における詩神モニータ（Moneta）の相貌の「おやみなく変貌しつつも、安らかな死は止めも刺しえず、死にむかいてすすみつつ死にいたることなかりし、その顔は」（It works a constant change, which happy death Can put no end to; deathwards progressing To no death was that visage.）という情景描写に近似の要素があると思えるのは、（別の機会に考えてみたいことではあるが）、たんなる偶然とはいえないのではなからうか。

二つには、上にあげた一節の「一本の樹に咲きつどう花々のごと」（blossoms upon one tree）という詩句の余韻が、かすかに聞きとれるかに思われるイエイツの「御身は葉か、花か、はたまた幹か」（Are you the leaf, the blossom, or the bole?—*Among School Children*）という詩句を半ば修辭的に転用して（というのには、同じイエイツの「怖るべき美こそ生れぬ」（A terrible beauty is born.—*Easter, 1916*）という詩句も、前稿でみたワーズワス、ひいてはシルトンの「あの畏怖をけむる美」（that beauty which—hath terror in it）の余韻を響かせているように思えるからだ）が、ワーズワスの汎神論的な神（あるいは自然）・観照の性格を尋ね、それが形而上学や神学上どのよう

な位置を占めるかという問題については、ここで深く立ち入る用意はない。が、しかし上にあげた詩節にみられるようなワーズワスの神（および自然）観照が、スピノザの宇宙観の一部に類似していることは、たとえば、アバークロムジー（Lascelles Abercrombie）、ジョン・ジョウンス、デイヴィッド・フェリー（David Ferry）などの批評家によって、それぞれの見地から指摘されていて、さきの『序曲』第二巻の不採択の草稿の注釈として、『エチカ』第一部（「神について」）のなかから、たとえば、「すべて在るものは神のうちに在る、そして神なしには何物も在り得ずまた考えられ得ない」（定理一五）、「神的本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方です：生ぜねばならぬ」（定理一六）、「神はあらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない」（定理一八）、「神あるいは神のすべての属性は永遠である」（定理一九）など、幾多の「定理」、系、および「証明」の文節をあげることができようし、また、サンブロン越えの詩節の注釈として、『エチカ』第五部（「知性の能力あるいは人間の自由について」）のなかから、（フェリーなども別の文脈で引用している）「定理二九」の「備考」のよく知られた次の文節をあげることができよう。^⑤

物は我々によって二様の仕方で現実として考えられる。即ち我々は物を一定の時間および場所に関係して存在するとして考えるか、それとも、物を神の中に含まれ、神的本性の必然性から生ずるとして考えるか、そのどちらかである。ところで、この第二の仕方で真あるいは実在として考えられるすべての物をば、我々は永遠の相の下に（sub specie aeternitatis）考えているのであり、そしてそうした物の観念の中には…神の永遠無限なる本性が含まれているのである。

(2) しかし、ワーズワスの自然観照がこのように類似性を見せるスピノザの神（および自然）観には、自然が神

という唯一の実体・本質の延長・属性であるという趣旨にそって、究極的には深遠な神秘主義に到る本来の面と、逆に、神即自然という方向に俗解され（ひいては唯物論に論拠を貸し与え）る面とがあるといわれるが、この重要な相違にたいする配慮からか、たとえば、アバークロムビーは、ワーズワス自身が、俗解された意味でのスピノザ的自然観を認めなかった点に言及しつつ、次のように語っていて、その一見当然と思われる言葉は、ワーズワスの自然体験の神秘性の性格を示唆する点で、忘れがたい指標の一つであろう。

ワーズワスが感知した、あの人間の理解力を超える全一的存在 (a unity of existence) は哲学的な概念ではなくて、彼が現にそれを生きた体験である。それは、実は、神秘主義的体験なのだ、もっとも、いささかただならぬ類いのものではあるが……ワーズワス自身その体験に（彼自らの言葉をかりれば）「いわゆる、しかし無分別にも、スピノザ的と称されるもの」(what is "ordinarily but absurdly called Spinozistic") のあることを否認したが、しかし、その体験は、真の意味でスピノザの神秘主義と呼びうるものにきわめて近似している。それは神を自然と同一視することはなかったし、もとより思惟と同一視することもなかった。自然は神であるが、神即自然ではないのだ。自然も思惟も（かりにワーズワスの体験を公式化できるとすればであるが）神の被造物ではなくて属性であり、それぞれは神の永遠・無窮の本質を体现しているのである。^⑤

ちなみに、この結びの一節の「自然と思惟は……神の属性である」という言葉は、『エチカ』第一部（定理一四・系二）の「延長する物、および思惟する物は神の属性であるか、さもなければ神の属性の変状である」などをふまえていることはいうまでもない。

さらにまた、アバークロムビーの一文に言及されている、俗解されたスピノザ的要素という意味のワーズワス

の言葉は、先にもふれたクラークソン夫人あての書簡のなかで、「ティンタン寺院」や『逍遙篇』(The Excursion) 第四巻などの詩節にあらわれる自然観に関して、一女性読者の疑問に答える一節に見える言葉であるが、そこにはワーズワスの神(および自然)観の一端が、きわめて私的に、素朴に語られている部分もあるので、多少長くはなるが、要旨の部分を用いてみよう。

なるほど、『逍遙篇』第四巻の終り近く、少年と貝殻の比喻が出てくるあたり (ll. 1133-1142) と、後続の一節には、いわゆる、しかし無分別にも、スピノザ的と呼ばれるものがどこかあります。しかし、眼の高い読者なら、その一節の作詩法上の劇的 (dramatic) な適切性をすぐにおわかりでしょう。…あなたの友人の婦人は、私が神の御業 (the work of God) としての自然と、神そのものとを区別していないといつて非難していますが、作品のどこにこのような教理が説きこんでいるのと同じように見ると、作者が、自然と神とを同一視しているとどこから推測するのでしょうか。実のところ作者は、至高者 (the Supreme Being) が宇宙にたいして占める立場は、時計製作者が時計にたいするのと同じものだ、とは思っていないのです。この国で採られている宗教教育の課程で、また私たちが聖書を用いるにあたって、常時、神が創り、給うたこと (making) の話をするほど有害なことではないのです。私が先日朝、四才半の息子とベッドでこのことについてかわした会話を、お友達の方が聞いてくれたらと切に思うのです。「神さまがどのように僕を作られたの。神さまはどこにいられるの。どのように話しかけられるの。僕に話しかけられたことはいちどもないもの」。私は息子に言っていました―神は靈であり (God is a spirit)、神は息子が触れてみることで自ら生身 (his flesh) のようなものではなくて、触れてみることでできない心の中の思いにより、似かよっているものだ (more like his

thoughts in his mind) と。——ちやうど風が樅の木立の梢を揺れそよがせており、空の光が小暗く繁った枝々のまわりに揺れおどっているのが、窓をとおして見えました——このように揺れそよぐ情景 (fluctuations) を見て、息子はいちずに叫びました、「あそこにちらつと神さまが在る、僕にはそれが見える」 (There's a bit of him, I see it there!) と。この話は必ずしも全部が父親のたあいもないかたこと話というわけではないのです。でなくて、ほんとうのところ、お願いですから、子供たちに宗教の話をするときには、創造のことは、できるだけ話さないようにすることです…

この一文の時計作りの部分は周知の一節であるが、子供との対話の一節は、それほど引用されることはないように思われる。けれども、『逍遙篇』のことはおくとしても、さきの「神は靈である」という語句の 'a spirit' という言葉や、「揺れそよぐ情景」(fluctuations) という言葉は、(本稿でもあとでふれるはずの)「ティンタン寺院」の一節の「万象を貫いてめぐりめぐるあるそよぎ、ある靈気」(A motion and a spirit that...rolls through all things. II. 106-108) に呼応するものであって、子供をめぐる話のなかの言葉ではあっても、やはり、ワーズワスの自然体験の本質に深く根ざしていることを、思い出させずにはおかないのである。

III

(1) ここでふたたび孤独・寂寥のモチーフにたちかえるならば、このように強調された少年と自然との孤独・寂寥の出会い・照応は、ワーズワスの詩作品を通じてあらわれるおびただしい(いわゆる)孤独者たち (the solitaries) と彼らをとおりつつむ寂寥の情景——二、三の例だけをあげるとすれば、「ルツ」(Ruth)、「ルーシー・グレイ」

(Lucy Gray)『「カンバーランドの老乞食」(The Old Cumberland Beggar)』『蛭とる老人』(The Old Leech-Gatherer)『序曲』第四卷の廃兵、『逍遙篇』第一卷の「廃屋」(The Ruined Cottage)詩節のマーガレットなど——の原体験ともいうべきものである、と同時に、『序曲』執筆の年月における回想的・還流的な追体験でもあるといえよう。そして、それら孤独者の情景の多くは、(自然の寂寥との照応はしばらくおくとすれば、断崖にきわどくぶらさがった鳥の巣掠りの少年や、「しかと生けるでも、死せるでもなく、はたまた眠れるでもなく、老いの極みにある」蛭とる老人 (Not all alive nor dead, Nor all asleep—in his extreme age) などがそれぞれの意味でその一例であるように、人間存在の極限状況としての孤独をも示顕しているのであるが、それに関連してここで想起しておきたいのは、これら孤独者たちの遠く遙かな背景として、『失樂園』(第十二巻)におけるアダムとイヴとの楽園出離のさいの孤独の情景が、ワーズワスの視野・展望のなかにあったと思われることである。

別の機会(旧稿)にもいちどのべたことがあるのだが、^⑦『序曲』第一巻冒頭の「今や私は自由で…望むところに居を定めることができよう…大地は見わたすかぎり私の眼前にある…」(Now I am free…May fix my habitation where I will…The earth is all before me…ll.9-16) という一節には(下・セリンコート版の註でつとに指摘されたように)『失樂園』第十二巻の結びの一節^⑧

The world was all before them, where to choose
Their place of rest, and Providence their guide;
They hand in hand, with wand'ring steps and slow,
Through Eden took their solitary way. (ll.646-649)

世界は見ゆるかぎり二人の眼前にあった。彼らはそこに
憩いの地をえらび、神の御意（みことご）を道しるべとする定め。

二人は手に手を取り、足どりもたどたどしく、

エデンの園を通りぬけて二人きりの孤独な道を辿った。

という詩行の影響がみとめられるのであるが、そのアダムとイヴとの、（それもおそらくは、互におのがじしの孤独を分かち合うという意味での）「孤独な道」という詩句にふくまれる出自・由来の想念が、『序曲』全篇はいうまでもなく、ワーズワスの多くの孤独者たちの背景として、遠い地鳴りのような余韻を、かすかに響かせているように思われるのである。いまかりに、おのがじしの孤独^⑧、といったのは、ここでつながれているイヴの手が、かつてはサタンの誘惑にのって、「アダムの手からそうっとはなれて」、「あの木の実にむかってのびた手」でもあったこと（Thus saying, from her husband's hand her hand Soft she withdrew...; So saying, her rash hand in evil hour Forth reaching to the fruit...Bk. IX, ll. 385-386; 780-781）の深い意味について、チャールズ・ウィリアムズ（Charles Williams）の卓抜な洞察が教えてくれるとおり、彼ら二人の樂園出離の所以は、イヴがアダムという（正統で説く）出自・本源からの由来（derivation）を、また二人は神の愛という本源からの由来を忘失した恣意の所為だからであり、二人の手が、不変の愛によって結ばれつつけるには、（イエスに体现された）愛の出自・本源への不断にして完全なる帰一を、二人がそれぞれに、まねび、ならう、ほかはないからでもある。

また、そのとき（旧稿）にもおいておいたことであるが、ミルトンにおいて、恣意の末路をたどるアダムとイヴを導くのが直に神意（^{みことご} Providence）であったのにたいして、ワーズワスの場合は、さきにみた『序曲』第一巻・冒頭の、「私は自由だ…」という（やはり、よかれあしかれ恣意をあらわす）詩行につづく一節の、「たとえ私を

導くものがひとひらの浮き雲にすぎなくても、道をたがうことがあるか……」(Should the guide I chuse Be nothing better than a wandering cloud, I cannot miss my way. ll. 17-19) においても「水仙」(*The Daffodils*) の「ひとひらの雲のように独りさまよい」(*I wandered lonely as a cloud.*) においても「蛭とる老人」(*The Old Leech-Gatherer*) の「老人はひとひらの雲のように動くともなく佇んでいた」(*Motionless as a cloud the old Man stood.*) においても、孤独者たちの情景には、必ずといってよいほど、自然の寂寥の情景が(雲とはかぎらず、岩や山、沼や湖、風や星、などとして)あらわれるのであり、それらの情景には、(ミルトンの場合とは多少とも異った意味ではあるが)、やはり、人間の出自・由来にかかわる想念が暗々裡に含意されていると思えるのである。が、ここでそのことにふれたのは、当面の四つのエピソードにおいても、少年と自然の孤独・寂寥の照応が、この出自・由来の想念と深くかかわっているように思えるからにはかならない。

(2) この点に関連して、もっとも鋭い示唆を与えてくれるのは、おそらく、A・C・ブラッドリー(A. C. Bradley)であろう。ブラッドリーは、ワーズワスの多くの詩篇において、孤独・寂寥の情景(sense of solitude)が本質的な要素(essential)であることにふれたあとで、「詩人が孤独であるというだけではない。詩人の眼にする事物も孤独なのである。…孤独なのは霊であり(What is lonely is a spirit) ある事物を孤独・寂寥(lonely)だと呼ぶことは、ワーズワスにあっては、その事物が無限なるもの(infinity)への光り輝く、あるいは、厳肅・荘嚴な展望(a bright or solemn vista)を開いてくれる、ということにほかならない」とのべ、いくつかの代表的な作品に言及しつつ、ふつう感傷的なバラッドと解されがちな「ルーシー・グレイ、または孤独」(*Lucy Gray, or Solitude*)のはらむ底知れぬ深淵のような孤独・寂寥の情景にたいしても、あらためて注意を喚起している^⑥。このバラッド

リーの言葉には、鋭い洞察と慎重な見解が含まれている。というのは、彼が「孤独なのは霊である」というとき、その「a spirit」は、詩人の霊、(his spirit) に限定されるのではなく、また、「寥々たる情景にやどる魂」(souls of lonely places) の一つに限定されるのもないのであって、ここでブラッドリーが言わんとした「霊」(a spirit) の真意を読みとるには、さきにあげたクラクソン夫人あて書簡の「神は霊である」(God is a spirit.) の「a spirit」が、ワーズワスの但し書きどおり、たんに子供相手の片言^{かたことば}ではなくて、文字通りの真意でもあることを、あらためて、思い起さねばならないし、それにもまして、書簡のさいにもふれておいた（し、また、おそらくブラッドリーの念頭にまっさきにかん^かんでいたであろう）「ティンタン寺院」のあの古典的な一節における「霊（氣）」(a spirit) を想起しなければならないであろう。

And I have felt

A presence that disturbs me with the joy

Of elevated thoughts; a sense sublime

Of something far more deeply *interfused*,

Whose dwelling is the light of setting suns,

And the round ocean, and the living air,

And the blue sky, and in the mind of man,

A motion and a spirit, that impells

All thinking things, all objects of all thought,

And rolls through all things. (ll.94-103)

そして、私は感じ知るようになったのだ――

気高き思いの生む喜びもて私の心を

たちさやがせるある存在を――いと遙かに深く

あまねく滲み透って在るもの、日ごとの夕日の光にも、

円やかな大海原にも、生き生きとそよぐ大気にも、

澄みわたる大空にも、はた、人間の心の内にも

あまねく宿るものの莊嚴な気配を――

思惟するものすべて、思惟・観照の対象たるものすべてを

生動させ、万象を貫いてめぐりめぐる

あるそよぎ、ある靈氣を。

この一節でも、さきの書簡でも、ワーズワスは、(そしてそれをふまえたブラッドリーも)、聖靈 (Holy Spirit) との混同をさけるためもあってか、小文字の 'a spirit' を用いているが、この 'a spirit' は、当面の四つのエピソードでいえば、スケート遊びの情景につづく省察の、あの「宇宙の叡智ある靈よ、永遠の思惟たる魂よ」 (Wisdom and Spirit of the universe! Thou Soul that art the eternity of thought!) という限定辞をともなった大文字の 'Spirit' に照応・合一するものであることは、これにつづく詩行が、

That giv'st to forms and images a breath

And everlasting motion... (ll.430-431)

そなた、形象ある事物に息吹きと

永遠・無窮の生動を与えるものよ…

となっていることから明らかである。そして、いずれの場合にも、ワーズワスの観照の眼差しは、万象の生命と生動の測り知れない出自・根源へと向けられていることは、いうまでもない。そして、この靈（氣）が、「思惟するものすべて」の「心の内」(in the mind of man)と「思惟・観照の対象たるものすべて」を「貫いてめぐり」、万象の「間にいと深く溶けわたって在る」(far more deeply *interfused*) ことの、より内面的な意味については、なまきの一節にならにつづく詩行で、やはり「問」(inter-) という用語・イメージに即して、また、『ハブル書』(一章・五——五) の、とりわけ「靈魂の父(the Father of spirits) は…我らを益するために、その聖き(holiness)に与らせんとて、訓し練え(chasten) たまはばなり」(九——一〇) などの余韻を響かせつつ、次のように語られている。

By day or star-light thus from my first dawn
Of Childhood didst Thou *intertwine* for me
The passions that build up our human Soul,
Not with the mean and vulgar works of Man,
But with high objects, with enduring things,
With life and nature, purifying thus
The elements of feeling and of thought,

And sanctifying, by such discipline,

Both pain and fear, until we recognize

A grandeur in the beatings of the heart.

(II.432-441)

こうして、いと幼き日々より、日の光はた星影のもと、

そなたは、私のためにと、われら人間の魂の素地たるべき

もろもろの情念をば、織りあげてくれたのだ——

人間の卑俗な仕業と緬まないませるのではなくて、

崇高なるものの姿、永劫・不朽の事物、自然・生来の生命、

と緬まない合わせつつ——また、そうして、

情感と思惟しゆいの素を純化し、その陶冶たうぎをとおして、

苦痛と畏怖おそおそとを共々に聖なるものに高めあげてくれる、

それゆえ、ついには、われらは脈うつ心臓の鼓動にも

莊嚴なるものの宿ることを感知するにいたるのだ。

この一節における「緬まない合わせる」(intertwine)という言葉も、さきの「ティンタン寺院」の「間まに溶けわたる」(interfuse)も、本稿の始めにあげた「交わり」(intercourse)や、さらに前稿でふれた「介入」(intervention)など少なからぬ縁語とともに、正統の概念としての「靈交」(communion)をふまえつつ、ワーズワス独自の自然観照をもちこんだ用語・想念であって、唯一者たる靈の内に包摂されて存在しつつ、同時に、その靈(氣)の生動をそれぞれの内部に宿している万象の、分かちがたい全一としての靈交のさまざまな様相をあらわそうとして

いる言葉である。が、上にあげた二、三の詩節では、唯一者たる靈の必然的な本性としての超絶的な孤独の相よりは、むしろ、唯一者たる靈による万象・相互の靈交の相が強調されているせいもあって、ワーズワスの観照の示顕する無限なるものへの展望は、どちらかといえばブラッドリーのいう「光り輝やく」方の様相を見せている、といえよう。

ところで、超絶的な孤独者たる靈に包摂されて存在しつつ、同時にその靈の孤独をそれぞれの内に宿している万象・相互の靈交の一樣相として、「思惟するものすべて」の個々の孤独と、「思惟・観照の対象たるものすべて」の個々の孤独との出会い——より正確には、「思惟するもの」の孤独が、「思惟・観照の対象たるもの」の孤独を媒介にして、あの超絶的な靈の孤独という出自・根源をかすかに感知し（というのは「いまだ神を見たものはない」（『ヨハネ伝』一章一八）からだ）が、ひいては、その超絶的な孤独への窮極的な回帰・帰一をおぼろげに予感し自覚する——という様相があらわれることも、ワーズワスの自然観照のはらむ必然的な要素の一つであって、四つのエピソードにおける少年の孤独と自然の寂寥との出会いも、そうした様相のあらわれの一端にはかならない。

(3) このような観点から見るととき、四つのエピソードにとって、「ティンタン寺院」の一節とともに、しかもそれとは多少異なった意味の陰影をともなっており、よい注釈の役割を果たしてくれるのは、「ルーシー・グレイ」であり、そこでは、ワーズワスの観照が、ブラッドリーのいう「厳肅」(solemn)な様相を、より端的に示顕しているといっても、この周知のバラッドにも「a spirit」という言葉があらわれるというわけではない。が、しかし、主人公のルーシー、すなわち、荒野の一軒家で両親のもとに生い立ち、「幼^{せまな}なじみも、友もなく」(No mate, no

comrade Lucy knew. l. 5) ‘わちかには野鹿や野兎を相手に育った (You yet may spy the fawn at play, The hare upon the green. ll. 9-10) 「ひとりぼちの子」 (The solitary child. l. 4) ルーシーの描写の在り方について、ワーズワスは (フェニック女史筆録の) 自註 (*Fenwick Notes*) のなかで、ルーシーという「人物を霊として見てあること」 (the spiritualizing of the character) ‘すなわち、霊格化してあることをのべ、その点こそこのバラッドが、類似の主題をあつかいながら、クラッブ (George Crabbe) 風な良い意味での即事實的な詩とは異なる特質だと語っているのだ^⑩。この ‘spiritualizing’ という想念が、すでにみた、万象をめぐるめぐるあの霊 (氣) ・ ‘a spirit’ という想念に根ざし、また呼応するものであることはいうまでもない。であればこそ、嵐の夜にそなえて、母を迎えに雪つもる荒野をこえて町まで行くよう父から言われ、「父上、まいります」 (That, Father, will I gladly do. l. 17) という (福音書的な響きをもつ) 言葉を残して出かけたまま、杳として消息をたった少女をめぐるって、結びの二連が語るような、不可思議な世界が示顯されるのである。

— Yet some maintain that to this day

She is a living child;

That you may see sweet Lucy Gray

Upon the lonesome wild.

O'er rough and smooth she trips along,

And never looks behind;

And sings a solitary song

That whistles in the wind.

だが、人によれば——今もなお
あの娘はたしかに生きている、
人気なき荒野ではあの愛し子を
見かけることもある——という。

ここかしこ、飄々とわたりゆき、
ひとたびとふりも返らず、
独りなる子の歌う声は、
野を吹きすさぶ風の音。

このように、生（者）と死（者）、生物と無生物との境をこえて、ひたむきに「ふりもかえらず」（And never looks behind）野をわたるルーシーは、超絶的な孤独者たる靈の「象・徴」（types and symbols of Eternity）であるのみならず、その靈の属性としての孤独者たる人間の、その出自・根源との出会い、そしてそこへの窮極的な帰一の情景をも体現している、といえよう。

ちなみに、ルーシーは（第二連で）「人住む門辺に生い立ったこよなく愛しきもの」（The sweetest thing that ever grew Beside a human door）と、あたかも草花のごとく、そして、その意味でルーシー詩篇の一つにおける「苔むす岩の辺の葦草」（a violet by a mossy stone）に通ずるもののごとく描かれており、この「愛しきもの」の 'thing' はすべにみた「思惟するものすべて」（all thinking things）や「万象を貫いてめぐりめぐる」（trolls

through all things) などの 'thing' に通ずるものである。が、上の(第二連の)詩行は、さきにみた「父さん、ま
いります」(That, Father, will I gladly do.) という(福音書的な含蓄のある)一行とともに、ルーシーが心素直な
少女であったことをあらわしていること、さらにまた、愛し子を探しあぐねた両親が、荒野の丘の上で「天にて
われらはいい会わん」(In heaven we all shall meet. 1.42)と(一見、常套文句と思えるが、しかし含みのある言葉
で)叫ぶことなど、いくつかの要素を、出自・根源への帰一という観点に重ね合わせて考えるとき、少女と老人
との違いこそあれ、『創世記』や『ヘブル書』にみえるあのエノクの神への帰一のことか思い起されるのである
——すなわち、「エノク神とともに歩みしが、神かれを取りたまいければおらずなりき」(『創世記』五章二四)、
「信仰に由りてエノクは死を見ぬように移されたり。神これを移したまいれば見出されざりき。その移さるる
前に神に喜ばるる者と証あかしされたればなり」(『ヘブル書』一章五)という、あの心直き者の不思議な帰一の在り
方を、(正統の教理でどのように説くかは別として)、このバラッドが暗にふまえているのではないかとさえ思わ
れてならないのである。もっとも、ルーシーの場合は、帰一の先が天ではなくて、万象を貫いてめぐりつつ、万
象を包摂する靈であり、それ故にこそ、その孤独なる子(the solitary child)の姿が「今なお…寥々たる荒野(the
onesome wild)で見かけられる」という(孤独・寂寥の照応の)点で、エノクの場合とは、一見、大きな相違が
あることはいうまでもないが。

(つづく)

(注)

- ① *The Prelude*, ed. by de Selincourt, p. 525.
- ② Letter to Catherine Clarkson, Jan. 1815 (*The Letters of William and Dorothy Wordsworth*, vol. iii, *The Middle*

Years, 1812-1820, ed. by de Selincourt, p. 188-189)

- ③ John Jones; *The Egrotical Sublime*, p. 38.
- ④ Lascelles Abercrombie; *The Art of Wordsworth* (Archon Books), pp. 129-30.
John Jones; *Ibid*, p. 36.
- David Ferry; *The Limits of Mortality*, pp. 7-8
- ⑤ スピノザの引用はすべて岩波文庫・『エチカ』（島中尚志訳）による。
- ⑥ Lascelles Abercrombie; *Ibid*, p. 129.
- ⑦ 旧稿・「[Glee] 飲の（の歌）」とらへ言葉の復活について（その二）——ワーズワスの『一八〇七年詩集』を中心に——
『英文学評論』第二十六集・四八—五〇頁）
- ⑧ 引用は *The Poetical Works of John Milton*, ed. by Douglas Bush (Oxford Standard Authors) による。
- ⑨ Charles Williams : Introduction to *The English Poems of John Milton* (The World's Classics), p.xvi-xviii.
- ⑩ A.C.Bradley; *Oxford Lectures on Poetry*, pp. 141-143.
- ⑪ *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. by de Selincourt, vol. 1, p. 360.